

「第 25 回 市民防災セミナー」

誰が生徒か？ 先生か？

—防災教育に果たすエンジニアの役割を考える— を開催

1. はじめに

技術士会北海道本部防災委員会では、2014年7月30日(水)にTKP札幌ビジネスセンター赤レンガ前において、第25回市民防災セミナーを開催しました。参加者は110名。そのうち約20名が技術士会会員以外の一般からの参加で、中には教員・大学院生なども含まれていました。

防災委員会には、地盤・交通・都市・水工の4部会と、市民向けの防災講座などを担当する防災教育ワーキングがあります。市民防災セミナーは通常各部会が持ち回りで担当することになっていますが、今回初めて防災教育ワーキングが都市部会と共同で開催しました。



写真-1 会場の様子

このような経緯から、今回のテーマは「防災教育」とし、エンジニアが防災教育にどんな役割を果たすことができるのか考える会としました。

セミナーは、長年にわたり防災教育を担当されてきた慶応大学准教授大木聖子先生による「これから

の地震防災教育—学ぶ側からアクターへ—」と題した講演の後、防災教育に関わる技術士と大木先生とのパネルディスカッションの、2部構成としました。

2. 第1部 基調講演

「これからの地震防災教育

—学ぶ側からアクターへ！—

第1部では、「これからの地震防災教育—学ぶ側からアクターへ！—」と題して、慶応義塾大学 環境情報学部 准教授 大木聖子先生から基調講演をいただきました。



写真-2 大木聖子先生による講演

大木先生は、NHKの「学ぼう BOUSAI」や、著書「地球の声に耳をすませて」など、地震防災教育の第一人者です。

講演では、学校現場における地震防災教育の様子などが紹介されました。先生の防災教育プログラム

では、「命の大切さ」を伝え、防災を「自分ごと」とすることを伝えているそうです。防災を「自分ごと」とする授業では、地震がおきた時に取るべき姿勢を、子供たちに自分で考えさせた例が紹介されました。予備知識なしで考えさせると、普通にしゃがむ子供が多くいるそうです。その子の肩を揺さぶって「それじゃあすぐに転んで頭を打ってしまうでしょう」と指導すると、最後にはうつぶせで膝を曲げて頭を抱える「ダンゴムシのポーズ」を自分で発見するそうです。このような実践を重ねたある学校が、本当の地震に襲われた時のビデオでは、体育館に座っているたくさんの生徒が、地震発生と同時に誰の指示も受けずにあっという間に椅子の下に隠れる様子が紹介されました。また、教室にある危ないもの探しをした事例では、はじめはあれもこれも全部危ないと気づきますが、時間をかけて話し合うと、危険の大きさに違いがあることを理解するそうです。「自分ごと」にする防災教育の重要性を痛感しました。

3. 第2部 パネルディスカッション 「エンジニアの

防災教育における役割を考える」

第2部では、防災教育に取り組んでいる技術士として、防災委員会防災教育ワーキング代表 城戸寛技術士、防災委員会地盤部会 北健治技術士、それに大木聖子先生を加えた3名でパネルディスカッションが行われました。



写真-3 城戸寛技術士

城戸技術士からは、防災教育ワーキングが、2009年の設立以来、札幌市の区民センターなどの防災事業に取り組んでおり、延べ1,000人以上の市民防災教育に貢献してきたことが紹介されました。北技術士からは、町内会の防災部長として、平成20年以来活動されてきた様子が紹介されまし

た。

またパネラーは座学のみならずDIGを用いるなどプログラムに工夫をすることにより、少しでもわかりやすく伝えるように、していると報告がありました。大木先生からは、体を動かすよ



写真-4 北健治技術士

うな方法が実践者を作るうえで大切であるとのコメントを通じ、これからの活動のヒントをいただきました。

また参加者に女性が少なく、高齢の方が多いといった悩みが話されました。大木先生は、防災に関する知識を伝え防災意識を高めることにより、「防災に強い文化」を作っているのだという意識で取り組むことの重要性を指摘されました。これを受けて、それぞれが与えられた場で、少しずつ防災に強い文化を作っていくということがまとめとなりました。

会場とのやりとりでは、北海道総務部危機対策局危機対策課防災教育担当課長 甲谷恵様から、日本技術士会北海道本部に、防災委員会のような市民防災に取り組む組織が存在し、しかも長く活動を続けている



写真-5 甲谷恵課長

ことに対し敬意を表していただき、これからも一緒に活動を続けて行きましょうというエールをいただきました。